

手と舞踊

花をかざしの天の羽袖

なびくも返すも舞の袖…… (羽衣)

と霞の中に舞いながら消えうせた天女のように、「舞」とは手振りが主となるものをいい、これに対し足を多く用いる「踊」と具象的な所作をあらわす「振」が日本舞踊の分類としてもちいられている。

「舞」では、扇など手に何かをもつて演じられることが多い。

これについて増田氏は、能を「扇と白足袋の美学だ」とのべているが、「心は十分に動かし、動きは七分にとめよ（動十分心 動七分身）」（花鏡）といわれる動きの意図的な抑制の過程で、ちらとこぼれる白足袋や、手先とその延長である扇の演ずる役割は決定的なものとなる。

日本舞踊のまだ初心者者の稽古をみたが、手先や扇の操作に関し

森下はるみ



(写真・青木信二)



て周到でこまかな指示が身体のどの部分より頻繁になされていた。これに対し、クラシックバレエの稽古の指示は対照的である。たとえば足を外輪に一八〇度外旋させて立つ基本姿勢にしても、「足をひらいて」の指示は皆無で、「おしりをしめて」とか「ももの後をしめて」という指示ばかりである。こうして骨盤や大腿部の外旋筋群を意図的に収縮させることで、膝や足の外旋が結果するという考えかたである。

日本舞踊と西洋舞踊の身体訓練や身体感をこれで見ると、日本舞踊はより“遠位的”“末端的”であるのに対し、西洋舞踊は、より“近位的”“中心的”ということができるとはならないだろうか。

日常、私たちは手 (hand) と腕 (arm) を区別することなく対話にもちいている。同様に足 (foot) と脚 (leg) の場合もそうである。この点が日本語と英語の大きな差異の一つであることを長谷川氏はじめ多くの比較言語学者が指摘している。

同様に、肘から手首までの前腕 (fore arm) と肘から肩までの上腕 (upper arm) に相当する日常語をもたない。しいてさがせば“小手”と“二の腕”であろうか。そこで幼児の身体部位の識別についても、英語民族なら六歳ごろから可能だという前腕・上腕の区別も、日本では大学生の九〇%以上が言語化できないということになる。

これも踊りの装束に代表される着物文化の影響か。あるいは、“手羽”とか“手羽さき”とかいうように動物の肉の解体と区分けを必要としなかった農耕文化の名残りであろうか。

(お茶の水女子大学)